

# 第1章 イヌの起源と進化

## 1 イヌの起源と分類

### (1) イヌの起源

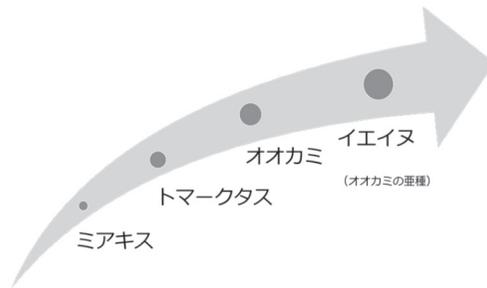
現在、犬(イエイヌ)はオオカミの亜種とされています。

昔は、オオカミは犬の先祖である、といわれていましたが、厳密にいうともっと近い遺伝子を持っていることが近年の研究で分かってきています。

2010年に発表された研究では、イエイヌに最も近いのは中東のハイロオオカミであると報告されました。

その後も犬に関しては新しい発見が次々に報告されています。

オオカミが進化して犬になった、というより、オオカミが家畜化されて犬となった、ということです。



### (2) イヌの分類

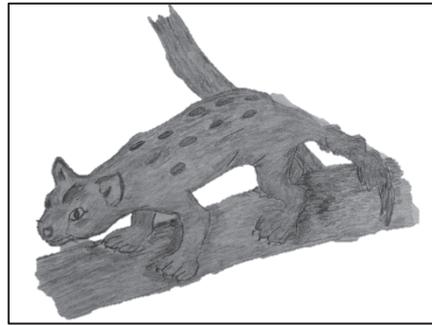
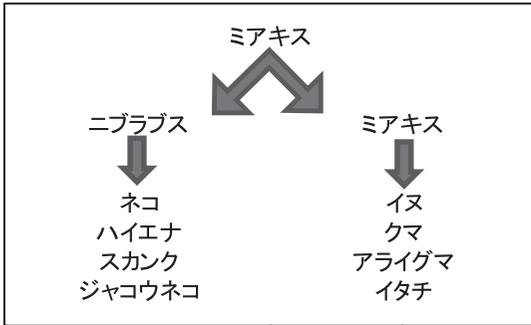
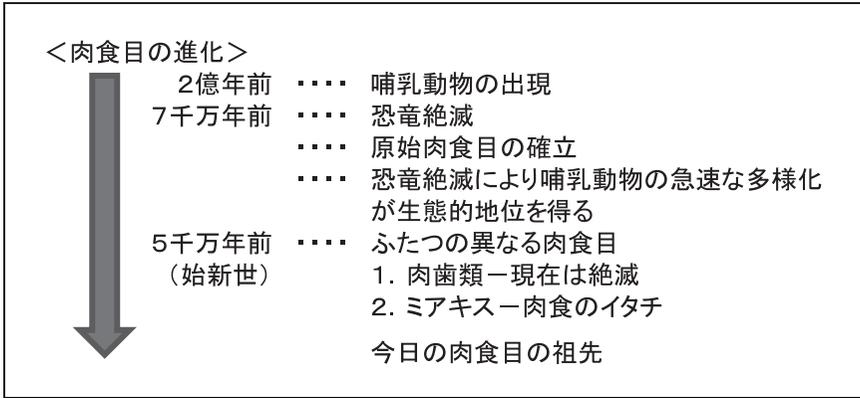
また、イヌの学名「*Canis lupus familiaris* (ラテン語)」は、「イヌ、オオカミ、家庭の者」という意味を持ち、「広義で言うイヌの一族、その中のオオカミという一派、更にそのうちの、人とともにある一群」という命名意図があります。

イヌ科には、オオカミ、コヨーテ、ジャッカル、キツネが含まれています。

学名	—	<i>Canis lupus familiaris</i>
界	—	動物界
門	—	脊索動物
綱	—	哺乳類
目	—	食肉目
科	—	イヌ科
属	—	イヌ属
亜種	—	タイリクオオカミ亜種イエイヌ
品種	—	プードルなどの犬種

## 2 イヌ科の進化

イヌの進化は次の通りです。



ミアキス イメージ図

以下の特徴は、イヌ科とネコ科が全く対照的であることを表しています。

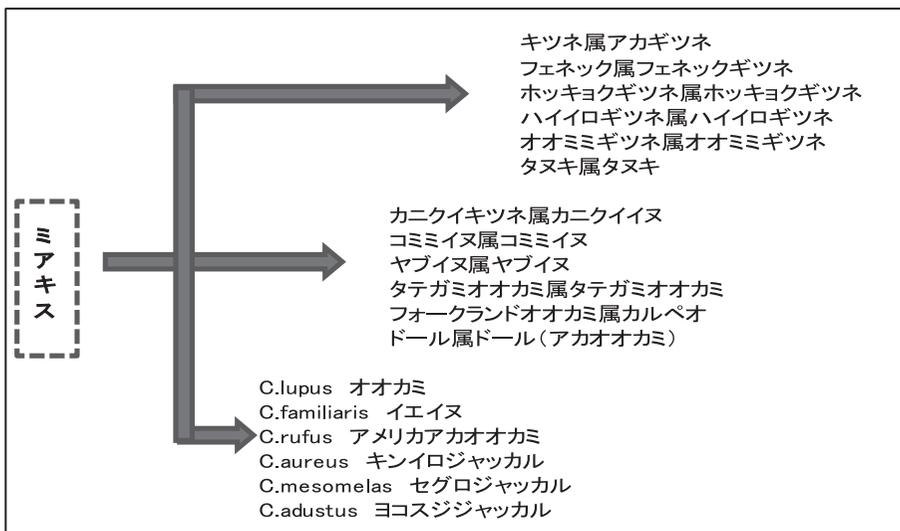
## (1) イヌ科の特徴

- 草原で暮らす
- 集団で獲物を捕らえる
- 長い脚が走行に適している
- 動くものを敏感に捕らえる視野
- 出し入れができない爪
- ほとんど模様のない毛皮
- 追いかけて狩りをする

## (2) ネコ科の特徴

- 森林で暮らす
- 単独で獲物を捕らえる
- 柔軟な身体
- 獲物との距離を正確に測ることができる目
- 出し入れができる爪
- 保護色としての模様を持つ毛皮
- 待ち伏せ忍び寄り狩りをする

南極大陸をのぞく地球上全ての大陸、砂漠地帯(フェネック)から北極付近(北極ギツネ)のあらゆる生息地で、イヌ科の動物が発見されるとともに、広範囲にわたり形態と行動が分かり、イヌ科においては著しい多様化が見受けられます。



イヌに最も近いとされるのは、コヨーテ、ジャッカル、オオカミと考えられています。はじめ、イヌの起源はジャッカルから進化した祖先犬であると思われていましたが、現在はオオカミに最も近く関係しているということが、遺伝学や形態学、習性などに基づいて考えられています。

しかしながら、オオカミがイヌの直系の祖先であることは、形態学的、行動学的に決定的な証拠がないのが実状で、様々な仮説が存在しています。系統発生図から見てもわかるように、イヌがオオカミから進化したのではなく、共通の祖先をもっていたらと考えられています。

イエイヌは恐らく、犬が家畜化する以前の区別種として分化したと思われ、同じような時期に、世界中で様々な犬種が現れているために、イヌは「オオカミのような」異なる祖先から世界のあらゆる場所で飼いならされたと考えられています。

## 第2章 イヌと人との関わり

### 1 人と家畜化

約12,000年前のアインマラハ遺跡(イスラエル)からは、埋葬された高齢女性の骨とともに、子犬の骨が発掘されました。

オオカミからイエイヌへと家畜化に至った方法は諸説あります。

#### 《幼熟個体を抜粋し育成した》

オオカミの巣からまだ幼い個体を連れ去り、幼い頃から行動を共にすることで人との暮らしへ慣らし家畜化を進めたとされています。

犬のしつけトレーニングにおいても「社会化期」と呼ばれる愛着形成の時期を活用し、様々な刺激に馴化する方法があります。

現代でもオーストラリアに住むアボリジニーと呼ばれる民族は幼体の犬科動物を巣から連れ去り、家畜化を行っていると言われています。

#### 《人懐こい個体を選び手懐ける》

いかに家畜として適しているといえど、元々は高い狩猟能力を有した肉食の動物です。

そのため、人に対して攻撃性や警戒心が薄い個体を選び、残飯など食料を分けて共生することで家畜化したといわれています。

また、そのように人に懐きやすい気質を持った個体同士を交配することで、さらに人との共生に適性のある遺伝子を持った個体を作り出し家畜化が進んだとされています。

#### 《かわいい個体を選んでいた?》

こちらは諸説ありますが、見た目からかわいらしさが優れていた個体を選び育てていたという説もあります。

一見突拍子のない説に感じますが、「かわいらしい(幼い顔立ち)=凶暴な気質が薄い傾向がある」といわれており、現代でペットとして人気の犬種も丸い目や短いマズルなど、幼い顔立ちが特徴です。

このことを「ネオテニー(幼形成熟)」といい、幼い容姿を保ったままの生体を指します。

また、高い声で鳴いたり甘えるようなしぐさをしてみたり、ついお世話をしてあげたくなる行動を「養育誘発行動」と呼び、かわいらしい見た目というのは生存のための立派な手法と言えます。

このようにオオカミやその他犬科の野生動物なども、攻撃性などが低い個体は、顔つきも現代のイエイヌに似た幼く俗にいうかわいらしい顔立ちになるということです。

## 2 愛玩犬への移り変わり

番犬や狩猟の手伝いなど、持ちつ持たれつのような関係から、いわゆるペットとされる愛情をもって飼養する対象へ移り変わった時代背景はどんなものでしょうか。

現代でもいえることですが、動物愛護は国ごとの価値観や文化によって発展方法も速度も大きく異なります。

そのため、いくつかの国に分けてペット文化の時代背景を解説します。

### ◎ヨーロッパ

ヨーロッパにおけるペット文化のさきがけは、王族や貴族の上流階級に属する人々が権威の象徴として、もしくは猟犬として実用的な使役が始まりといわれています。

現代のペットという文化とは少し乖離してはいますが、十八世紀以降では珍しい動物や猟犬を飼うことがステータスであり、自慢である以上はかわいがりながら大切に飼われる犬がいたとされています。現代のかわいがること、ともに家族として暮らすことを目的とした飼養と同じとは言い切れないながら、中世のヨーロッパでは家畜でありつつもペットと呼べる文化がすでに存在していたことがわかります。

現在、動物愛護において先進国の一つとされているドイツに焦点を当ててみると、動物愛護に関する国としての働きは19世紀までさかのぼることになります。

1871年「ドイツ刑法典360条13号」にこのような法律が記されています。

<公然と又は不快感を生じさせるような仕方動物を意地悪く虐待し又は粗暴に取り扱った者は、軽犯罪として150マルクの罰金又は拘留の刑罰を受けるもの>

一見、近代の動物愛護の考えに似た刑法に感じますが、実際は違法となる定義に大きな違いがあります。

「公然と又は不快感を生じさせるような～…」という部分に注目すると、主語は人であるということが読み取れます。

つまり、「人が不快に感じるような動物の虐待は禁止」というような内容のため、現代の動物愛護に関する法律のように、動物の福祉を尊重するためという目的とは違ったものとなります。

その後1933年にはアドルフ・ヒトラーを首相としたナチス政権へと移行しますが、実はヒトラーは愛犬家であったとされています。

そのためナチス政権下でのドイツは動物愛護に熱心であったとされ、同年11月には「ライヒ動物保護法」が制定されました。

ライヒ動物保護法は、前述の「ドイツ刑法典360条13号」のように人を主体としたものとは異なり、動物の福祉を考えた現代の動物愛護思想と限りなく近いものとなりました。

日本の「動物愛護管理法」の制定が1973年であることを踏まえると、動物愛護という観点での取り組みは積極的であり、現在の動物愛護先進国とされている現状にも頷ける時代背景です。

### ◎中国

中国のペットの歴史を辿ると、唐の時代(618年～907年)の絵画にペキニーズと思われる犬種の姿が残されており、少なくともその時代からペットとしての犬の存在があったとされています。

しかし、1980年以降になると、狂犬病のまん延を危惧して家庭犬の飼育が禁止されるなど、一度はペット文化がなくなってしまったという珍しい歴史背景を持ちます。

そして1992年にペットの市場が再び形成され、同年には野生動物保護法が制定され、そこから急速な市場成長を見せ、世界的にも抜きん出たペット市場規模を誇ります。

近年でのペット飼育事情では、飼い主は20代～30代の若年層が多く、8割近くを占めているといわれています。

この背景には中国の経済的な急成長が関係しているといわれており、生活が潤ったために新しく家族を迎え入れようとする人が多いと考えられています。

また、過去に「一人っ子政策」という政策があり、これもまた現在のペット文化急成長の一要因といわれています。

1979年より行われた政策で、一家庭当たりの子供を1人までに抑えるよう国民に促すという政策でした。

当時は急激な人口増加が国内で問題視されており、それに伴い食糧不足等深刻な問題の解消を目的として実施されました。

そこから2014年まで一人っ子政策を行い、現在の若年層にもその政策によって「一人っ子」の人が多くいます。

そのため、兄弟代わりとして、新しい家族としてペットを迎え入れようとする人が増えたとされています。

また、高齢者層でもペットを飼う人が増えており、一人っ子の子供が自立をし、家を出ることによる寂しさから、ペットを新しい家族として迎え入れようという傾向が増えているそうです。

現在中国で飼育されている家庭犬の頭数は5,000万頭以上です。

約14億人という膨大な人口からすると、少なく感じてしまうかもしれませんが、ペット市場の再形成が1992年ということ踏まえるとその発展速度の速さからペットへの関心の強さが汲み取れます。